

刑事弁護をめぐる理論と実務の叢智がここに集結!!

実務体系 現代の刑事弁護



1 弁護人の役割

A5判・434頁・定価 本体4,500円+税

2 刑事弁護の 現代的課題

A5判・472頁・定価 本体4,500円+税

編著：後藤 昭 高野 隆 岡 慎一

本書の特色

- ◆刑事弁護の実務を再構築し、弁護士自らが考え実践するための指針を提示。
- ◆捜査弁護、公判前手続、公判及び証拠法の各分野で、最新の立法と実務運用の中で浮上してきた問題点につき、実践的対処法を論じています。
- ◆日本の刑事弁護をリードする弁護士・研究者が執筆!!

お試し読み、お申し込みはコチラ

<クレジットカードでもお支払いいただけます>



第一法規

検 索

CLICK!

第1部 弁護人役割論の座標軸

- 第1章 弁護人の存在意義（後藤昭）
- 第2章 弁護人の義務論（浦功）
- 第3章 依頼者の意思と専門家裁量（笠井治）
- 第4章 弁護人の訴訟法上の地位（加藤克佳）
- 第5章 犯罪者の更生への弁護人の関わり方—弁護士は、依頼者の更生に関われるか？ 関わるべきか？—（石塚伸一）
- 第6章 弁護活動の限界（岡慎一・神山啓史）

第2部 刑事弁護の倫理

- 第7章 刑事弁護における利益相反（小坂井久）
- 第8章 共同被告人の弁護人間の倫理（下村忠利・高山巖）
- 第9章 刑事弁護人と守秘義務（中山博之）
- 第10章 虚偽証拠禁止の意味—職務基本規程75条の意味、被告人の虚偽主張への対応等—（上田國廣）
- 第11章 身体拘束中の被疑者・被告人との接見、書類・物の授受（葛野尋之）
- 第12章 証拠の取扱い—開示証拠を中心に—（森下弘）
- 第13章 依頼者（被告人）の意思と上訴（船木誠一郎）
- 第14章 被害者との対応（村木一郎）
- 第15章 報道への対応—取材への対応方法、マスコミを利用することから生じる問題—（弘中惇一郎）
- 第16章 刑事弁護と懲戒制度（水谷規男）
- 第17章 弁護士依頼権をめぐる検察官倫理（指宿信）
- 第18章 被害者参加と弁護士倫理—被害者を代理する弁護士について—（池田綾子）

第3部 刑事弁護の基盤—刑事弁護を支えるもの—

- 第19章 刑事弁護の教育（神田安積）
- 第20章 刑事弁護の担い手（武士俣敦）
- 第21章 弁護の質の保証（村岡啓一）
- 第22章 日本における国選弁護制度のあり方について（山口健一）
- 第23章 接見交通権（田淵浩二）
- 事項索引
- 判例索引

第1部 捜査弁護

- 第1章 被疑者・被告人の身体拘束をいかに回避するか（前田裕司）
- 第2章 取調べにどう対処するか（坂根真也）
- 第3章 刑事施設における弁護側専門家の面会等について（金岡繁裕）
- 第4章 一般接見に関する弁護活動（和田恵）
- 第5章 訴追裁量と弁護活動（谷口太規）

第2部 公判前手続

- 第6章 公判前整理手続に付されない事件の弁護活動（菅野亮）
- 第7章 証拠開示の現状と課題（斎藤司）
- 第8章 「争点整理」と刑事弁護のあり方（宮村啓太）
- 第9章 死刑事件の弁護（後藤真人）
- 第10章 裁判員選任手続の現状と課題（西村健）

第3部 公判

- 第11章 被告人の着席位置、服装（青木和子）
- 第12章 手続二分の可能性と弁護実践（四宮啓）
- 第13章 審判「公開」を巡る諸問題（萩原猛）
- 第14章 裁判官と裁判員の役割分担（宮村啓太）
- 第15章 裁判員裁判に対する上訴（大橋君平）
- 第16章 被害者参加と無罪推定（奥村回）

第4部 証拠法

- 第17章 厳格な証明と自由な証明（後藤昭）
- 第18章 同一性・真正の証明（高野隆）
- 第19章 「必要性」判断から「許容性」判断への一元化へ（角田雄彦）
- 第20章 自己矛盾調書の証人への提示・朗読（高見秀一）
- 第21章 鑑定から専門家証言へ（趙誠峰）
- 第22章 検察官調書（刑訴法321条1項2号）をどうするか（伊藤睦）
- 第23章 自白の任意性立証にどう対処するか（秋田真志）
- 第24章 証明基準（河津博史）

事項索引
判例索引